

3. 大学生ボランティア活動の概況

1) 先行ボランティア調査に見る大学生ボランティア

本節では、1996年7月に中央日報社が実施した全国ボランティア調査を主に使用し、大学生ボランティアについて概観する。中央日報社は1996年、全国の20歳以上の男女1217名を対象にボランティア活動に関するアンケート調査を実施した。大都市対象の調査で、全国を代表するには限界があるが、客観性において信頼できる最新の全国調査であるため、本節で使用することにした。特に断りがない限り、本節において使用しているデータ・資料は全て中央日報社の調査(1996年7月)である。またこの調査の結果は、20代、30代など年齢別に分析されているが、本節では20代を大学生と見なし分析することにする。

まず、韓国ではボランティア活動についてどのように認識されているか知るために、「ボランティアと言えば、まず何を思い浮かべますか?」という質問に対する回答を見てみる。

- 身体障害者を助けること	11.7%	- 老人を助けること	6.7%
- 貧しい人を助けること	9.5%	- オリンピックボランティア	6.7%
- 自らすすんで助けること	9.4%	- 奉仕活動	5.5%
- 養護施設・孤児院	8.4%	- 農村奉仕活動	4.1%
- 養老院勤務	8.1%	- 良いこと	3.6%

他に、犠牲3.2%、無報酬の奉仕活動2.8%、交通整理2.7%、環境保護2.2%等が続く。これを見ると、人助けがボランティアというイメージを持っているのではないかと推測できる。では次に、ボランティア参加者が実際には、どのような活動をしているのか次の表を見てみよう。

- 養老院等、老人を助ける	21.5%	- 地域住民への奉仕	4.5%
- 障害者を助ける	16.4%	- 公園の清掃	4.0%
- 養護施設・孤児院での活動	13.6%	- 道路周辺の清掃	3.4%
- 農村奉仕活動	6.8%	- 青少年の指導・相談	3.4%
- 環境に関するキャンペーン	5.1%	- 交通整理	3.4%

この二つの結果から分かることは、韓国では「社会的な弱者を助けること = 社会福祉 = ボランティア」と捉えられている傾向があるということである。また実際、そのような活動

をしている人が多いことも読み取れる。活動分野も社会福祉関連と環境の分野に偏っている。ボランティアと聞いて思い浮かべるものに、オリンピックボランティアや農村奉仕活動も挙げられているが、これらは韓国のボランティアの歴史において人々の関心を集めた活動であり、韓国の特徴であると言える。

次に、ボランティア活動への参加意思があるかどうかという問いに対する回答を見ると、大学生は他世代に比較し、参加の意向は最も高く「大変ある」と「少しある」を合わせて、76.9%である。だが実際には、最近1年間におけるボランティア活動への参加については、他の世代に比べて低く、19.6%となっている。活動期間も「1年未満」が7割で、それほど長続きしていないようだ。では、ボランティア活動に参加している大学生について具体的に見てみよう。

< - 6表：ボランティアの年齢別分布と活動分野 > 単位：人（%）

	計	15 - 19才	20代	30代	40代	50代以上
社会福祉分野	123	5 (4.1)	43 (35.0)	20 (16.3)	24 (19.5)	31 (25.2)
その他の分野	227	5 (2.2)	51 (22.5)	63 (27.8)	60 (26.4)	48 (21.1)

出著：政務長官第2室（1993）「ボランティア実態調査」

- 6表から分かるように、社会福祉分野のボランティア参加者は20代が35.0%で最も多い。これについては数値が少々異なるものの、他の調査でも同様の結果が見られる。中でも特に20代前半の参加率が高い¹⁾。よって、学生ボランティアが社会福祉分野で多く活躍していることが分かる。ただし、職業別に見ると、社会福祉分野では主婦のほうが多く活躍している。

では、大学生がボランティア活動に参加する動機・きっかけは何であろうか。

< - 7表：ボランティア活動への参加のきっかけ > (%)

参加のきっかけ	20代	30代	40代	50代以上
友人の勧誘で	20.0	15.3	6.8	8.3
新聞などの広告を見て	6.0	6.8	6.8	0.0
教会、学校、サークル活動	54.0	55.9	50.0	45.8
家族・教師等の勧め	18.0	18.6	31.8	41.7

全世代ともに、教会やサークル活動の一環として、参加している場合が多い。大学生に見

られる特徴は「友人に誘われて」参加することになった人が多いということである。ただ、この質問の回答項目には「自らの意思で」という項目がないという問題点がある。そのため、筆者はアンケート調査の実施に当たり、この項目も選択肢として加えた。

また「ボランティア関連業務を行ったり、活動場所を紹介してくれる場所を知っていますか」という問いに対して、8割以上の大学生が「知らない」と答え、「ボランティア活動をやりたいが、どうすればいいかわからず、できなかったことがありますか」という問いに対しても、約3割の大学生が「はい」と答えている。

以上の先行調査・研究から、「活動への参加意思はあるが、どのようにすればよいか分からない学生が、友人が参加している社会福祉関連の活動に誘われたり、またはサークル入ったりしてボランティア活動に参加することになった」という大学生ボランティアの姿を推測できる。この結果には、筆者も驚いた。なぜなら、聞き取り調査を通じて出会った多くの大学生もこのような人がほとんどだったからである。ボランティア活動をやってみたい、ボランティアに関心があるという気持ちを友人・サークルの勧誘が後押ししているという現実には実際にあり、これは学生ボランティアの特徴のひとつであると言える。しかし大学生らが「ボランティア活動をやってみたい」と思っているのか、あるいは「(大学生が考えるような)困っている人や弱い人を助けたい」と思っているのかという疑問が浮かぶ。この疑問については 章で考察し、解決することにして、次節に進みたい。

2) 「5.31教育改革」が大学にもたらした影響

「5.31教育改革」は大学生ボランティア活動にどのような影響を与えたのだろうか。中高生に比べると影響はそれほど大きくないが、大学におけるボランティア活動も「5.31教育改革」により、短期間で量的な面において飛躍的に拡大した。

現在、韓国の大学・短大などの高等教育機関におけるボランティア活動にはいくつかの特徴が見られる。その第一は「ボランティア論」等、ボランティアに関連した授業を設置する形態である。また第二は、ボランティア活動を行っているサークル活動の多様化だ。しかし第一の点は、まだ始まったばかりというのが現実である。

本節では、教育改革の影響を受けたと思われる第一の点について詳しく述べたい。5.31教育改革以降、漢陽大学をはじめとし、多くの大学が「ボランティア単位制」を導入し、さらに一定期間のボランティア活動を必修卒業条件とした大学も出てきた。

< - 8表：大学・専門大学におけるボランティア関連科目の設置状況 >

区分	大学数	教科目数	単位	履修時期				
				学期中	長期休暇中	年中		
大学	59	117	1.7	87	4	26		
専門大学	44	44	1.4	27	5	12		
合計	103	161	1.55	114	9	38		
	履修方法			履修区分				
	理論	実習	理論と実習	教養必修	教養選択	専攻必修	専攻選択	一般選択
大学	9	19	89	25	65	1	20	6
専門大学	4	6	34	18	18	2	6	0
合計	13	25	123	43	83	3	26	6

備考：韓国大学社会福祉協議会（1997）より抜粋

- 8表から分かるように、103校のうち必修科目として、46のボランティア関連科目が設置されており、全体の約3割にのぼる。しかし、ボランティア活動そのものの研究やコーディネートなどを専門科目として位置付け、実践的な教育課程を設置している大学は極めて少ない。これは韓国では、「大学生ボランティア活動の3つの基本的目的は、地域社会の必要に応じて、市民としての技術と社会的責任感及び学問的能力を強化し、学生に量的・質的に機会を提供するためのものである」(玄外成、1998)と考えられているためであろうか。つまり、大学生によるボランティア活動が教育・研究とともに大学の3大機能のひとつである²と考えられており、ボランティア活動自体に関する研究はそれほど重要視されていないためではないかと考えられる。なぜなら、大学におけるボランティア活動の歴史は、第 5章第1節でも述べたように、1960年代に始まった農村奉仕活動にまで遡り、大学においてボランティア活動が活発になったのは最近の動きというわけでもないためである。大学生がボランティア活動を行うことは推進されてきたけれども、ボランティアに関する研究はこれまで大学では行われてこなかったようである。

(注)

¹ 金容熙(1997)

² 前掲書、李慧京「第5章 大学のボランティア」